

平安時代にはその存在が確認できる神事芸能の神楽。
全国に5000を超える神楽が伝えられ、独自の文化が花開く。
長崎の離島では神々の舞が暮らしに息づき、継承されている。



上：五島・福江島の玉之浦神楽に伝わる「入鹿高松」。イルカ役は5～6人の観客が舞台に上がり、回りながら舞う。写真は鈴を鳴らしてイルカを追い払う二人の高松。下：中通島の上五島神楽の「柴取」。天岩戸に隠れている天照大御神への捧げもののための櫛を、山の神のもとへ取りに行く演目。

画像提供：（一社）壱岐市観光連盟、新上五島町観光物産協会、五島市



住吉神社の大大神楽で披露される壱岐神楽。天孫降臨の際に天照大御神に遣わされた邇邇芸命を道案内する猿田彦（右）と、猿田彦のもとに最初に様子を見に行った宇豆女（左）。猿田彦との問答神楽が繰り返される。猿田彦の面は迫力のある力強い神の面相で、宇豆女は端整な顔立ちに涼しげな眼もと、穏やかな面相である。

Text by Junko SEKIYA



五島

島が育むローカリティ。
素朴で勇壮、清々しい
一体感に包まれる

Information

五島神楽（例大祭・新上五島町）

11月17日（日） 本山神社
11月24日（日）・25日（月） 榎津神社

観光神楽

地元保存会の協力により
例大祭以外でも神楽の拝観が可能です。

●新上五島町
場所：有川神社・青方神社・政彦神社など
拝観料：1組32,400円
お問い合わせ：新上五島町観光物産協会 電話0959-42-0964

●五島市
場所：指定の宿泊場所や可能な神社
拝観料：1組60,000円
お問い合わせ：五島市観光協会 電話0959-72-2963



上：上五島神楽の獅子舞。最後の演目で獅子と天狗による悪魔払いの舞。参拝客も巻き込み、賑やかに締めくく。左：翁と姫が仲睦まじくお神酒をいただく「山賀」。左下：天岩戸に隠れた天照大御神の出現を祈った「神幣」。下：玉之浦神楽の獅子舞。獅子は2人で操る二人獅子で、鬼が獅子を手なづけ獅子の背に乗る。



ると各地区の神社では秋祭りが始まり、昼は神輿が練り歩く神幸祭、夜は神楽が奉納される。五島神楽は福江島の福江・岐宿・富江・玉之浦と、中通島の有川・上五島、宇久島の宇久の7つの神楽の総称で、それぞれの地域色を取り入れた独自の演目が特徴だ。

「神楽は宮中の御神楽と民間の里神楽に分けられますが、五島神楽は里神楽らしい親しみやすさが魅力で、和気あいあいとした雰囲気包まれます。演目は30ほどがあり、なかでも玉之浦神楽で伝わる『入鹿高松』がじつにユニークです」と教えてくれたのは五島神楽連合会会長の五島典昭さん。「入鹿高松」はイルカの群れを舞で表現し、イルカを追いかける人物も登場する。福江島の西端にある玉之浦、漁業で栄える町らしい演目という。太鼓や笛などの演奏に乗せ、面を着用しない直面で剣などの採物を手に舞う採物舞や、巫女舞、獅子舞など、神楽ごとに趣向が異なるので、見比べてみるのも一興だ。

九州には壹岐や五島のほか宮崎の高千穂神楽や熊本球磨神楽など、10の神楽が国の重要無形民俗文化財に指定されている。これらの保存団体が九州神楽としてユネスコ無形文化遺産登録へ向けて取り組みを進めている。

神楽の語源は神が宿るところを意味する「神座」から転じたとされる。豊作豊漁を願い、感謝し、災いを追い払う儀式は地域で受け継がれ、愛されてきた。日本の伝統芸能の原点といえる舞や歌を知る離島への旅に出かけてみてはいかがだろうか。

全国各地の知られざる魅力を
ダイナースクラブの
目利き力をもってお届けします。

本誌76～77ページを
あわせてご覧ください。



壹岐

神と人を結ぶ神職が
神聖な世界へ誘う、
特別な一日

Information

壹岐神楽

大大神楽 12月20日（金）
住吉神社にて14:00～



上：面杖を持ち、豪壮に舞う猿田彦。猿田彦の御神徳を称える神楽。右：神宝の剣で四方を切り払い、悪魔災い諸々を退散させる「四剣」。右下：屋外の斎場にしめ縄を張り、御湯の靈威により清め払う儀式の「湯立行事」。下：大大神楽が行われる住吉神社。大阪、福岡、下関の住吉神社とともに日本四大住吉と称される。

博多港からジェットfoilで約1時間、紺碧の玄界灘に浮かぶ壹岐島にたどり着く。『古事記』では5番目に生まれた島で、別名「天比登都柱」と言われ、天上と地上を結ぶ島の意味がある。神々とのつながりが強い壹岐では約700年の歴史を誇る壹岐神楽が脈々と受け継がれている。壹岐神楽の最大の特徴は、舞も音楽も神職のみが行うことである。今では日本各地の神楽が、保存と継承のために民間の保存会などにゆだねられている。ゆえに神楽を神と人をつなぐ神職のみが行うという伝統を継いでいるのは、唯一無二のことなのだ。

さらに驚くことに、壹岐には神社本庁に登録されている神社だけでも150社ほどがあり、年間300を超える神楽が、わずか18名の神職により奉納されている。神楽はその規模により、幣神楽、小神楽、大神楽、大大神楽に分けられる。舞人・楽人12人以上で奉納される大大神楽は年2回あり、毎年12月20日、住吉神社での神楽は島の神社の神職たちが集い、面をつけ、剣などを手に35曲の演目を7時間ほどかけて執り行う。

「大大神楽は地元民にとっても私たち神職にとっても一年を締めくくる特別な行事です。秋の収穫が終わったあとの冬の楽しみであり、神への感謝を示すもの。神々の力比べを表す神相撲、両手と口に三本の刀を持って舞う二剣など、勇壮でアクロバティックな演目もありますが、天岩戸や天孫降臨の神話を表す静かな神聖性がある演目が壹岐神楽らしいと思います」。こう話すのは住吉神社宮司の川久保貴司さん。猿田彦や宇豆女など神の出現を表す神楽面をつけた舞は、非日常の世界へ連れて行ってくれるかのようだ。大大神楽は午後2時頃から始まり夜9時頃まで続く。時に厳かに、時に和やかに神との対話を感じる一日である。

壹岐の南西、152の島々から成る五島列島にも約400年の歴史を持つ五島神楽が根付いている。五島といえば「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として世界文化遺産登録され、教会のイメージが強いが、10月にもな